

2022年4月24日

「人間の誉れでなく」 テサロニケの信徒への手紙一 2：1～12 佐々木佐余子

このテサロニケの信徒への手紙は、パウロがテモテとシルワノと一緒に第2回目の伝道旅行をした時、およそ紀元後51年頃、執筆されました。初代教会で最初に書かれた手紙です。1節を読むと、「わたしたちがそちらへ行ったことは無駄ではありませんでした」とあるように過去形で書かれているのは、パウロたちが旅をして、テサロニケに行きコリントまで来たときに、そこで振り返ってテサロニケの人々に手紙を出したので過去形になっているのです。

パウロたちが2節で言っているように、フィリピで伝道していた時、大変苦しめられたことがあったのです。けれど、そのような状況の中で、神に勇気づけられ力を与えられて宣教したのです。パウロがフィリピに滞在していたころ、占いの霊に取りつかれている女奴隷とすることで町中大騒ぎになったのです。(使徒言行録16：18)パウロたちは捕らえられ牢に入れられました。しかし、地震が起こり、看守が、囚人たちが逃げたと思って、自殺しようとしたのです。けれど、パウロが止めて主イエスを信じるように勧めたところ、家族全員が信じて洗礼を受けたのです。その時、町の高官たちがパウロたちを釈放しようとしたところ、「ローマ市民の我々を勝手にムチ打っておいて」とパウロが言ったところ、高官は詫言を入れて町を出て行ってくださいと、お願いしたというところがありますが、そのことをこの手紙で言っているのです。このような困難にも屈することなく伝道出来たのは、神の召命が強く与えられていたからでした。そうでなければ、さっさと伝道することを辞めてしまったのではないのでしょうか、と想像します。3節で言っているように「わたしたちの宣教は、迷いや不純な動機に基づくものでも、また、ごまかしによるものでもありません」と明確に言っております。

4節からはパウロの伝道の動機が書かれています。なぜパウロは伝道するのか。教会の中には、一部ですがパウロを良く思っていない人たちがいたのです。当時、各地を渡り歩いていた偽りの伝道者がいて、パウロたちも同じ仲間だと誤解する人がいたのです。パウロたちが、愛の心で教会を訪問すると、自分たちを支配するために来たのではないか、と言われ、困窮しているエルサレム教会に献金を届けようと呼びかけると、だまし取られるのではないかと疑われたのです。教会の内部でこのような有様なものでした。それでパウロは4節でこのように言っています。「わたしたちは神に認められ福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです」と。さらに5節を読むと「あなた方が知っているとおりに、わたしたちは、相手にへつらったり、口実を設けてかすめ取ったりはしませんでした。そのことについては、神が証ししてくださいます」と弁明したのです。でもこの弁明は自分の弁明ではなく、神のための弁明だったのです。パウロの自己弁護なら黙していたでしょう。パウロの弁

明はあくまでも神の働きがそしられないためであり、神を悪く言われられないためであり、福音が誤りなく伝えられるための弁明だったのです。主の恵みが与えられて成長しているテサロニケの教会が、そのような愚かなことで揺れ動いてもらいたくない、と考えたのでした。それはどの教会も七里教会も同じですね。せっかく主の恵みをいただいて成長しているのです。このまま真っすぐ神に向かって成長させてもらいたいと思います。パウロだけではなく、他の使徒たちも自分の誉れを望みませんでした。他の書簡を読んでも、どの使徒も自分を誇ることはなくただ神にのみ栄光を表したのです。音楽家のJ.S バッハは、作曲した最後にソリ・デオ グロリア ただ神にのみ栄光あれ (Soli Deo gloria) と自署したそうです。あれほどの才能を持ちながら人間の誉れを求めず、ただ神にのみ栄光を表したのです。

7節からはパウロがどのように教会を育てたかを述べています。パウロは自分を幼子に見立てています。パウロは、本当はキリストとしての権威を主張することができたのに、あくまで謙虚になり自分を幼子にしています。「わたしたちは、キリストの使徒として権威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように」と言っています。パウロは幼子のようになったのでしょうか。良く分からないですね。聖書を読んでわからないところがあれば、聖書に聞けと言われていました。それで、口語訳を開いてみました。2章の7節にはこのように書かれていました。「むしろ、あなたがたの間で、ちょうど母がその子供を育てるように、やさしくふるまった」とありました。このほうがわかりやすいですね。やさしくふるまったのです。また、新改訳では「それどころか、あなたがたの間で、母がその子供たちを養い育てるように優しくふるまいました」となっており、このほうがずっと通る気がします。ただ、幼子は謙遜で偉ぶったり高ぶったりしないものです。この場合幼子は今で言う幼稚園児から小学校低学年あたりまででしょうか。パウロはここで自分を三つの型で表します。幼子、母親そして、父親です。母は無条件にどんな子供も愛します。それが母性ですね。ただ、現在では新聞等を読むとだいたい変形しているように感じますね。パウロたちはそのまま暖かく無条件で子供を愛する母親のようにテサロニケの信徒に接しました。8節を読むと、「わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです」と語っていますが、このようにパウロから言われるなんて素晴らしいですね。9節からはガラッと口調が変わります。「兄弟たち、わたしたちの労苦と骨折りを覚えているでしょう」と言っています。伝道者としてのパウロの生涯を見ると、投獄、むち打ち、暴動、難船といった外側からの艱難に加えて、さらに内側からの艱難それが最も怖いのです。誤解や非難や信仰的な問題、異端問題等など苦しみに直面した伝道でした。けれど、誰にも負担をかけまいと、夜も昼も働きながら伝道したのでした。彼はテサロニケの信徒たちを生み出したという意味で、自分自身を父親として母親として語っているのです。そして11節にあるように、「あなたがたが知っているとおりに、わたしたちは父親がその子供に対するように、あなたがた一人一人に呼びかけて、神の御心にそって歩むように励まし、慰め、強く勧めたのでした。御自身の国と栄光にあずからせよう、と神はあな

た方を招いておられます」と述べています。人は、子供が誕生して親になると喜びと共に子供を育てる責任をずっしりと覚えます。テサロニケの伝道で多くの霊の子供たちの誕生を見たパウロは、その後、子供たちの養育に全力を傾けました。子供の成長のために、パウロは厳しい中にも愛をもって育てる父親に自分をなぞらえています。その父親の役目は、12節にあるように「呼びかけて、神の御心にそって歩むように励まし、慰め、強く勧めたのです」。その父親の愛は威厳をもって子供を正しい道に導くために訓戒する愛なのです。この父親の愛は「あなた方一人一人」に注がれます。この父親の愛と母親の温かく包み込む愛によって、テサロニケの信徒は成長していったのです。

パウロたちは自給伝道でした。「夜も昼も働きながら」と言っています。その頃は、多くは開拓の伝道であり、集会の人数も少なかったので伝道者を十分に助けられる状態ではなかったのです。今の日本みたいですね。これから日本の伝道もますますじり貧状態が続けば、教会一本で牧師家族を支えられる教会は少なくなってくるでしょう。年金を給付されている年配の人が活躍するでしょう。私もそうですが。でもどういう形であれ教会が継続できればいいのです。

私は昔、神学生の頃、桜新町教会で手伝っていました。桜新町はサザエさんで有名です。その教会は桜新町教会と名乗っていましたが、開拓伝道なので信徒さんは数名でした。牧師さんは家族を支えるため何でもどんな仕事も、土方でさえしたとおっしゃっていました。その先生はカール・バルトの『主の祈り』を翻訳された先生です。今はもう亡くなりましたが、ご夫人も働いていました。礼拝堂も建てられて、本当に血を吐くような思いで伝道されました。今は教勢も伸びて成長しています。七里教会もそうですね。最初の先代の先生は、身を建築関係の職人から起こされて、伝道所から教会へと立ちあげた先生です。その伝道の熱意はすさまじいもので、ご家族全員で支えられました。皆さんもよくご存じでしょう。私もここに招聘されて、「神様からやりなさい」と言われているのだと解釈し頑張っております。

12節後半に「御自身の国と栄光にあずからせようと、神はあなたがたを招いておられます」とあるように、テサロニケの信徒たちは、多くは異邦人でありながらも、パウロの言葉を人の言葉ではなく、神の言葉として受けとめていたのです。人間の言葉であればいずれ滅びるでしょう。けれど人の誉れの言葉ではなく、神の言葉として受け入れ、聴いていたのです。そのようなテサロニケの信徒たちは伝道者の誉れであり、喜びであると結んでいます。

この後次々と書簡をパウロは執筆して信仰の地固めをしていきます。福音の種は世界中に蒔かれて丁度春時の今頃のように、芽を出し伸ばして、迫害をものともせず成長していくのです。